

名称：気仙沼図書館で地域価値発見：フィールドワークと哲学カフェ  
「気仙沼てつがく探検隊」第2回

開催日時：平成29年3月19日(日)9:00~16:00

開催場所：気仙沼中央公民館、気仙沼図書館、舞根湾・九九鳴き浜

主催：Ristex委託研究「多世代哲学対話とプロジェクト学習による  
地方創生教育」・立教大学河野哲也研究室

共催：気仙沼市教育委員会、気仙沼図書館、岡田新一設計事務所

協力：「NPO法人 森は海の恋人」 畠山信 副理事長

参加：ジュニア・リーダー(小・中・高校生9名)

立教大学ファシリテーター・スタッフ：

河野哲也(文学部教育学科教授)、奇二正彦(生態計画研究所主任研究員、立教大学元兼任講師、帝京科学大学兼任講師)、柳瀬寛夫(岡田新一設計事務所 取締役社長、立教大学兼任講師)、福井夏海(異文化コミュニケーション研究科博士課程前期課程修了生)、院生学生：花井彩也子(文学研究科博士課程前期課程)、小出晋之将(比較文学研究科博士課程)、廣畑光希(社会学部4年)、進藤初音(教育学科3年生)、盛岡千帆(武蔵野大学教育学部3年生)

気仙沼市担当：熊谷英樹(気仙沼図書館長)、千田基嗣(本吉図書館長)

千葉正幸(生涯学習課長補佐)、神谷卓也(同 生涯学習係主幹)

本紙記録：柳瀬寛夫、進藤麻理(岡田新一設計事務所 図書館・児童センター設計担当)

目的：学年を越えて子どもたちが集まり、地域の自然と文化、歴史、産業を「フィールドワーク」で体験し、自分たちの住んでいる場所の価値と問題を見つめ直し、これからどのような地域社会をどのようにつくっていけばよいかを「哲学カフェ」で話し合う。対話を通し、見出した自らの関心・探究課題について、「図書館」で個々人が資料の探索を行う。(なお、図書館は新館の完成まで仮設利用のため、「哲学カフェ」は中央公民館に会場を借りた。)



研究所前の船着場から養殖筏に向かう



舞根森里海研究所 (NPO拠点施設)

①オリエンテーション  
⑥まとめ・昼食

②牡蠣養殖筏

③対岸

④山越え

⑤九九鳴き浜 (国指定天然記念物)

ルートは、2/25事前調査にて決定

### 1. フィールドワーク：ファシリテーター畠山信 副理事長 (NPO法人 森は海の恋人) + サポート奇二正彦 (9:45~12:45)

①中央公民館に集合しバスで舞根へ。「NPO法人 森は海の恋人」の活動拠点「舞根森里海研究所」の多目的室にてオリエンテーション。畠山先生のわかりやすく楽しい話が始まる。風があるので櫓漕ぎ船でなく、動力船2艘で出発。



②牡蠣養殖筏に到着



筏から吊られたロープには牡蠣以外に、海藻やホヤなど多様な生き物が共生していることを観察



海藻のミル。海松色(みるいろ)の語源との説明。平安朝からの伝統色の名が海藻から採用されていることに改めて海の国日本を実感



市キャラクター「ほよぼよーや」のモデル、ホヤ。植物プランクトンを餌とする動物。生きたホヤに初めて触る子がほとんど

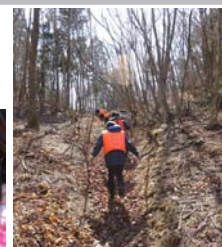


牡蠣は、1個あたり200L/日の海水を濾し、植物プランクトンを栄養源とする。ロープ1本に50個、筏1台100本とすると、この筏だけでどれだけの海水を濾す働きをしているか? など、次々に面白い話題が飛び出してくる

海に落ちそうになりながら、筏に乗ってみる。15m海底まで見通せる



③対岸の浜にも蟹や貝など生き物が多い



④山を越えるとまた海がみえてくる



⑤国の天然記念物「九九鳴き浜」動物の足跡。爪から砂は細かく、歩くときクックッと鳴く



波打ち際のワカメ。根元のメカブに付いて食べてみる



⑥多目的室にてまとめの学習。食物連鎖、生物濃縮の事例などから、自然を守る大切さを聴く

### 2. 哲学カフェ：ファシリテーター

<テーマ設定まで及び全体指導>河野哲也、<テーマ対話>小学生グループ 花井彩也子 + 中学生グループ 廣畑光希(13:30~15:30)

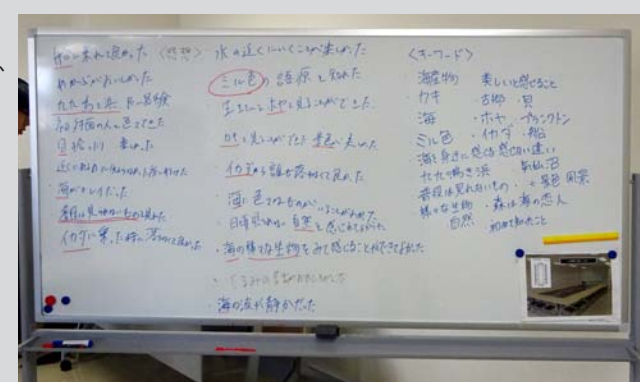
- 立教大学ビデオ教材をもとに、趣旨・進め方説明
- 呼び名を書いた紙を前に全員でスタート。前回作成したコミュニケーションボールを持つ人が喋るルールで、一人ずつフィールドワークの感想を述べ合う。次にキーワードを拾い出す。そして、キーワードから問いかけ(テーマ)を出し合い、多数決により1つに絞り込む。選ばれたテーマは、「自然を感じるって、どういふことか?」
- 小学生5名、中学生4名のグループに分かれ、大人たちも混じって、そのテーマについて話し合う。ファシリテーターが進行し、書記がホワイトボードに発言内容を書き込んでいく。
- 最後に、全員集まり、それぞれ気づいたことを発表しあった。



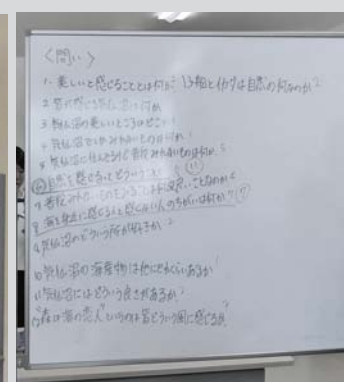
全員で対話する様子。各自呼んでほしい名前を紙に書いて、前に置いている



「自然を感じるって、どういふことか?」<中高生グループ> 具体的に感じるのは、空気がおいしい時、いつもと違う虫など見た時、普段みられない美しさ、自然災害にあった時、などが挙げられた。周りに山や木があふれている人は自然を感じないか? 室内にしていると感じない? 窓の外の景色を感じる、光が室内に反射する様にも自然を感じる、でも外よりは感じない。…人工物との違いは何か? 人が手を加えた植林は自然か? 成長は自然のなか、では自然を感じる境目は? 同じ人でもその時の状態によって感じ方は変わるのでは…などが話し合われた。最後に、自分では気づかない意見もあり楽しかった、などの感想が印象的だった。



ホワイトボード記録:<感想>



<キーワード>



<問い>

<自然を感じるって、どういふことか?>中高生の意見

### 3. 図書館にて本をさがす：

(15:30~16:00 過ぎ)

関心を深めた対象や課題を学べる本を探す。図書館長から本の分野ごとの並びや探し方の説明を受ける。図書館の活用の仕方を改めて体験。すべて終了後、ふりかえり(アンケート)用紙に感想を書いてもらった。初回参加の5名は、哲学カフェの時間を、「ふしぎ」「貴重」「勉強」「交流できた」など新鮮に受け止めていた。2回目参加4名の言葉には「楽しい」がめだち、次回へのアイデアも具体的だった。



哲学カフェで「船」を話題にしていた小学生は、船を図解した本に飛びつき、床に座って読んでいた



高校生が小・中学生に解説しながら「海事・水産」の棚から本を手にとって。一日を共にした後の自然な光景に、ほほえましさを感じた



小学5年生から高校1年生まで、解散前に記念撮影